元総社明神遺跡XIII

土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査概報

1997

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

元総社明神遺跡 XIII

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

写真提供 株式会社日本航空

序

かつて、中国では都をつくるのに条件が整った場所を選んだと言われています。中国の影響を受けたわが国においても、古代の都をつくるには四神相応の地を選んだと言われています。

ここ元総社明神遺跡が存する一帯も上野国府を推定させる地であり、まさに四神相応の地と言える場所です。

この地一帯には総社神社、国府、国分寺、学校院若御子明神等の建物や地名が残っています。

また、蒼海城跡もあり、中世においてもこの地が栄えていたことが想像出来ます。これらのことからも本遺跡が存する一帯が古代、中世の前橋の歴史を解明するのに切っても切れない重要な地であると言えるでしょう。

元総社明神遺跡は本年度で13次の調査となります。いずれも、前橋市都市計画事業に先立つ事前の発掘調査として継続実施されているものです。

過去の調査では、群馬町の三ツ寺遺跡出土の大形高坏と同形体の土器の出土や瓦を使用した建物址、一町ごとの溝、人形の木製品、墨書土器の出土等周辺遺跡や豪族間の関連、国府関連の遺跡、遺物の出土と遺跡の重要性を示すものが多々発見されてきました。

発掘面積は狭くかつ、家の建て替え、庭の樹木の掘り起こし等でだいぶ撹乱され、遺跡の確認に苦労しました。しかし、発掘作業員さん達は、小さな土器片も見逃すことなく、新しい発見を期待し発掘調査を続けてくれました。そんな中で、古墳から平安時代の住居址８軒が発見できたのは、ていねいな調査のおかげと思っております。一つ一つの遺物や住居址そのものが重要なものとの断定は難しいとは思いますが、元総社明神遺跡全体に位置付けると遺跡解明の一つの資料になると思います。一読していただき、ご指導、ご助言をいただければ幸いと存じます。

平成９年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　　長　　中　西　誠　一

例　　言

1．本報告書は、前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業施工者 前橋市　代表者 前橋市長 萩原弥惣治が実施する区画整理事業に係る元総社明神遺跡発掘調査概報である。
2．遺跡は、群馬県前橋市元総社町字屋敷2407-10番地ほかに所在する。
3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　中西誠一が施工者　前橋市長　萩原弥惣治と委託契約を締結し実施した。
調査担当および調査期間は以下の通りである。

発掘・整理担当者	戸所慎策・古屋秀登（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）
発掘調査期間	平成８年５月20日～平成８年６月28日
整理・報告書作成期間	平成８年７月８日～平成８年７月22日
	平成９年１月６日～平成９年３月19日

4．本書の原稿執筆・編集は戸所・古屋が行った。整理作業をはじめ図版作成には、大島きく江・鈴木民江・高橋公代・多田啓子・塚本富江・中林美智子・堀込とよ江・森田純子・山口淳子・赤城美代子・粟岡エミコ・岩田敏子・生形かほる・大塚美智子・鬼塚成子・佐野貴恵子・柴崎まさ子・戸丸澄江・舩津明美・松田富美子・綿貫綾子の協力があった。
5．下記の専門分野については、次の機関ならびに方々のお世話になった。
松田　猛氏：瓦・土器鑑定（群馬県教育委員会）
6．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。
2．挿図に建設省国土地理院発行の1/20万地形図（長野・宇都宮）と1/2.5万地形図（前橋）を使用した。
3．本遺跡の略称は８Ａ７６である。
4．各遺構の略称は次の通りである。
H…古墳・奈良・平安時代の住居址、D…土坑、Y…焼土
5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構	住居址・土坑・焼土・柱穴…1/60、全体図1/125
遺物	土器・石器…1/3・1/4、瓦…1/4、石製品…1/2

6．スクリーントーンの使用は次の通りである。

遺構断面図	構築面…斜線
遺物実測図	炭化物…斑、施釉範囲…霙、須恵器断面…黒塗り
	灰釉陶器断面…濃点

7．遺物分布図のシンボルの使用は次の通りである。
○…土器、△…石器・石製品
なお、接合状態は実線で結んだ。

── 目　　次 ──

序……i
例言・凡例……ii
目次・図版・挿図・表……iii
I　調査に至る経緯……1
II　遺跡の位置と環境……1
　1　遺跡の立地……1
　2　歴史的環境……3
III　調査の経過……4
　1　調査方針……4
　2　調査経過……5
IV　層序……5
V　遺構と遺物……6
VI　まとめ……9

図　　版

口絵　1　元総社明神遺跡と周辺地域
PL.　1　調査区全景
〃　2　H－1・2・4号住居址
〃　3　H－5～7・10号住居址
〃　4　H－10・11、Y－1号焼土、D－5・9号土坑、グリッド出土遺物
PL.　5　出土遺物（1）
〃　6　出土遺物（2）

挿　　図

頁
Fig.　1　元総社明神遺跡の位置……iv
〃　2　位置と周辺遺跡図……2
〃　3　調査経過図……5
〃　4　標準土層図……6
〃　5　元総社明神遺跡XIII全体図…7
〃　6　上野国府学説……10
〃　7　H－1・2号住居址……13
〃　8　H－4・5号住居址……14
Fig.　9　H－6・7号住居址……15
〃　10　H－10・11号住居址……16
〃　11　Y－1～4・6・7・10号焼土、D－1・3～7号土坑……17
〃　12　出土遺物（1）……18
〃　13　出土遺物（2）……19
〃　14　出土遺物（3）……20

表

Tab.　1　土器観察表……11
〃　2　石器・石製品観察表……12
Tab.　3　焼土観察表……12
〃　4　土坑観察表……12

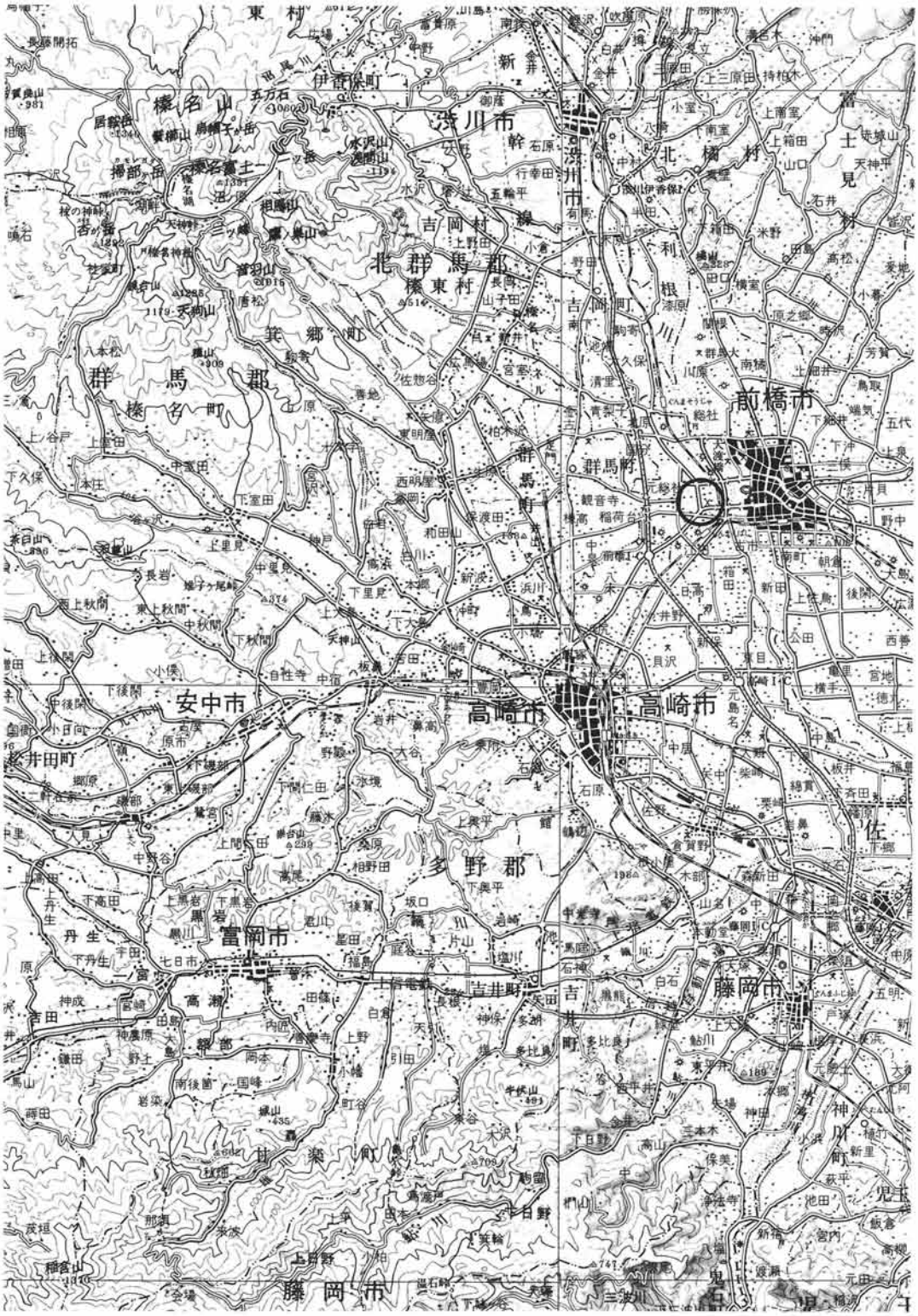


Fig. 1　元総社明神遺跡の位置

I　調査に至る経緯

昭和48年に計画策定された前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業について、事業担当課である区画整理第一課との協議により、導水路部分を中心に埋蔵文化財の発掘調査を実施することが決定した。

まず、初年度である昭和57・58年度の２ヶ年で、前橋市教育委員会が国庫補助金を受けて遺跡範囲確認調査を実施した。その結果、濃密な遺構の分布が認められたことと遺跡地が推定上野国府域に所在することの重要性に鑑みて、再度協議を重ね、昭和59年11月15日付で『元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』が前橋市長と前橋市教育委員会教育長との間で締結された。調査は区画整理事業の進捗状況に則して、前橋市教育委員会の組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団で実施することになった。

なお、『元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』は、昭和63年４月18日・平成３年１月８日および平成５年８月26日付でその内容を一部変更している。

平成８年度の調査は、委託者から平成８年４月５日付で調査依頼書が提出され、５月８日付で委託契約を締結し、事業実施の運びとなった。現地での発掘調査を平成８年５月20日から６月28日まで行い、整理作業は７月８日から22日及び平成９年１月６日から３月19日まで実施した。

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合谷を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、大きく北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地（前橋台地）、両者の地溝をなす沖積低地（広瀬川低地帯）、現利根川氾濫原の４地域に分けられる。

元総社明神遺跡の立地する前橋台地は、約24,000年前浅間火山の爆発によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。西は、前橋市の北西端にあたる清里地域で榛名山麓にひろがる相馬ケ原扇状地と移行部を形成し、本遺跡地までおよんでいる。微地形的に多少の起伏はあるものの、ほとんど平坦台地面といえよう。前橋台地面の水系をみると、榛名山水系の諸河川が裾野を南北方向に開析し、前橋台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。総社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比高３～５ｍをもって南東方向に流れている。段丘崖上は高燥な台地で、桑園を主とした畑として利用さ

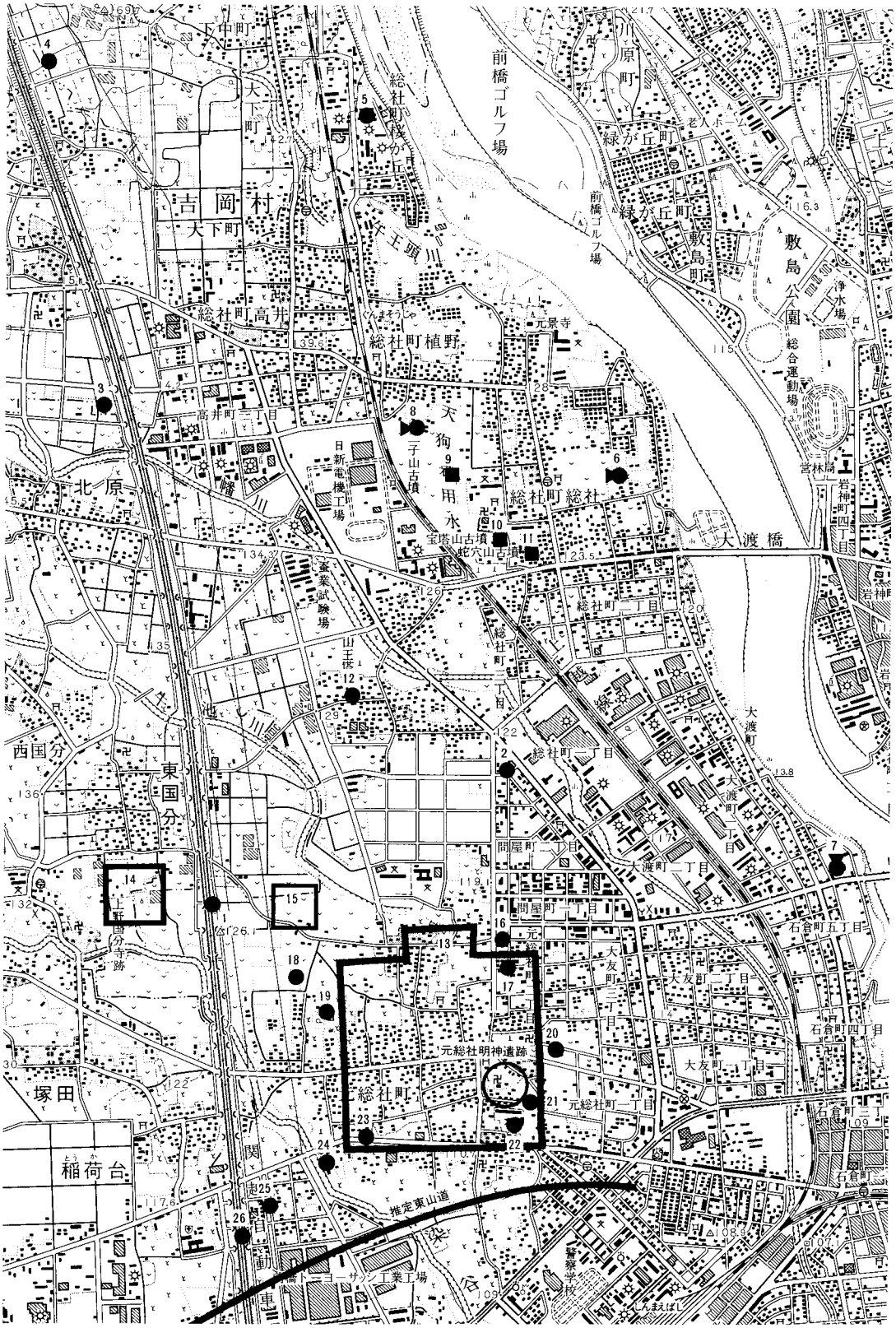


Fig. 2　位置と周辺遺跡図

れてきた。またこの台地上は恰好の居住地であったらしく、古墳時代から奈良・平安時代にかけての多くの遺跡が残されている。

元総社明神遺跡の本年度の調査区は、前橋市元総社町に所在し、群馬県庁より西へ約２km、ＪＲ上越線新前橋駅より北西へ約１kmの地点に位置している。本遺跡地は、利根川の右岸に位置し、前橋市街地と川を挟んで対峙する形になっている。群馬郡群馬町東牛池沼に発し元総社町南部字落合で染谷川に合流する牛池川の台地上に占地している。この台地の西側は牛池川に向かってゆるやかに傾斜し、その比高は３～４ｍを測り、右岸の段丘上には総社神社が鎮座し、地域の産土神にもなっている。本遺跡地の南側に、国道17号（高前バイパス）、主要地方道前橋・群馬・高崎線（前橋・安中線）、東側に市道大友・石倉線（通称産業道路）、遺跡地内を県道足門・前橋線が走っている。これらの幹線道路を中心にオフィスビルや商店・住宅が建ち並び、原状を明らかにすることはできないが、標高112～117ｍの北西から南東に向かいわずかに傾斜する地形が窺える。

2　歴史的環境

本遺跡地周辺は推定上野国府域として古代史の注目を浴び、さらに中世に至っては蒼海城が築かれた。それらを含めた歴史的推移を見るために、時代別に遡って周辺の歴史的環境の概略を把握しておく。縄文時代では、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡①や産業道路東・西遺跡②で検出された前期・中期の集落を筆頭に挙げることができ、当地域の縄文文化を考える上で重要な資料といえる。その他に、下東西遺跡③、長久保遺跡④などが列挙され、時期的には前期から後期初頭の範囲に及んでいる。

弥生時代の調査例は少なく、後期の住居址が検出された上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡①、桜ケ丘遺跡⑤、下東西遺跡③等に散見するだけである。井野川、染谷川流域に比べ格段の差を生じるのは、本地域が高燥化した土地であることの地形的要因に帰するためであろう。

古墳時代を彩る一大モニュメントとしての古墳が本遺跡地周辺に姿を現すのは、５世紀後半である。利根川右岸段丘上に、主軸で70ｍを超す前方後円墳の遠見山古墳⑥が造られる。その後、本遺跡の北約２kmには、総社古墳群を構成する古墳が連綿と築かれる。まず、川原石を用いた積石塚である王山古墳⑦、次に国指定史跡で前方部と後円部に石室を有する総社二子山古墳⑧、巨石使用の横穴式石室に家形石棺を安置した方墳の愛宕山古墳⑨、同じく方墳で県内最終末期と考えられ、仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳⑩と蛇穴山古墳⑪などが挙げられる。宝塔山古墳の南西約500ｍに所在する山王廃寺⑫にみられる石造物群は、宝塔山古墳石棺や蛇穴山古墳石室と同系統の石造技術を駆使して加工されたと考えられている。その共通する技法から時代決定を知る根拠とされ、白鳳期の建立とされる山王廃寺を中心にして、総社・元総社周辺では、仏教文化が古墳文化と併存しながら開花した様子を窺うことができる。

奈良・平安時代に至ると、上野国府⑬・国分僧寺⑭・国分尼寺⑮等の建設とあいまって、当地域はいよいよ古代上野国の政治的・文化的中心地としての様相を帯びてくる。国府については、12年次にわたる発掘調査と戦前からの研究史がある。また推定国府の周辺遺跡では、閑泉樋遺跡⑯、閑泉樋南遺跡⑰、小見遺跡⑱、草作遺跡⑲、大友屋敷遺跡⑳、寺田遺跡㉑、元総社小学校校庭遺跡㉒、天神遺跡㉓、染谷川遺跡㉔、弥勒遺跡㉕等がある。

国府の成立年代は定かではないが、大化２年(646)の改新の詔の二に「初脩二京師一、置二畿内国司郡司…」(日本書紀巻25) とあり、国司制度とともに殆どの国府が新設されたものと考えられていることから、奈良時代以前には国府が既にできていたものと推定される。また、『倭名類聚鈔』によれば「上野国　国府在群馬郡…」とあり、その位置として「群馬久留米国分為東西二郡府中間国分」の記述がある。これらの文献および総社神社の『上野国神名帳』研究等により、当地域に国府があると推定され、地名や地割りからいくつかの想定案が提出されている。また、国分僧寺の発掘調査は昭和55年12月から始まり、それ以降毎年発掘調査が進められ各種遺構の礎石、築地、堀などが確認されている。国分寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が進められて、その道筋にあたる鳥羽遺跡㉖、上野国分僧寺・尼寺中間地遺跡①等がある。これらの遺跡からは、膨大な数に上る奈良・平安時代の住居址が発掘されている。このことからも、奈良時代から平安時代にかけて当地では飛躍的に集落の拡大した様子が窺える。

中世には蒼海城が築かれ(1429年)、長尾氏の城下となり、現在の街路の祖形は、その時の蒼海城の堀割りを利用したものと考えられている。また蒼海城の縄張り自体も国府跡を利用しているものと推測され、国府の解明が一層複雑なものとなっている。

Ⅲ　調査の経過

1　調査方針

昭和57年度から始まった元総社明神遺跡の発掘調査は、今年度で第13年次を迎え、終了することとなった。本遺跡の調査対象地は道路部分であるため狭長な調査区が多い。昭和57・58年度に実施したトレンチの呼称に踏襲して、その後も共通な呼称法が採られ、東西方向にのびる調査区をアラビア数字で、南北方向にのびる調査区をアルファベットで呼称してきている。また南北方向に使われたアルファベットはＺトレンチに達し、それ以後ギリシャ文字を使用している。この慣例に従い今年度の調査区は34トレンチと呼称した。

今年度委託された調査面積は120m²である。調査実施に際しては、発掘調査範囲の全域をカバーする４ｍグリッドを設定し、最小単位とした。各グリッドの呼称方法は、東西方向をＸ軸とし、西から東へＸ１、Ｘ２、Ｘ３…、南北方向をＹ軸とし、北から南へＹ１、Ｙ２、Ｙ３…、で表し、それぞれ北西の交点をグリッド名とした。その他、調査実施段階での方針は以下の通

りである。

1．土層観察は遺構中央部で交差するセクションベルトを設けて行う。

2．10cm四方以上の遺物は縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドット標記した平面図を作成し、取り上げに際しては遺物台帳に諸属性を記録する。

3．遺構平面図は原則として縮尺1/20で図化する。なお、測量の基準点はＸ３－Ｙ４グリッドで公共座標は第IX系（Ｘ＝42832.000，Ｙ＝－71012.000）である。

2　調査経過

今年度は、平成８年５月８日に発掘調査委託契約を締結した。調査区の中の植木の移植が完了した５月20日から重機による表土掘削を実施し、調査を開始した。地表面から30cm位下部から土器片が出土し、全体に浅い表土掘削となった。21日からは人力による掘り下げ作業を開始した。硬い土のため作業効率は悪かったがプラン確認・精査を行い、６月18日に高所作業車による遺跡の全景写真を撮影した。埋め戻しは重機により６月21日に行った。現場事務所において出土遺物の洗浄・注記作業を実施し６月28日に引っ越しをして、現場でのすべての作業を終了した。次の稲荷遺跡発掘調査の関係で７月８日から22日まで遺物整理作業を行い、稲荷遺跡発掘調査終了後、平成９年１月６日から３月19日まで再び遺物整理作業及び報告書の作成を実施した。

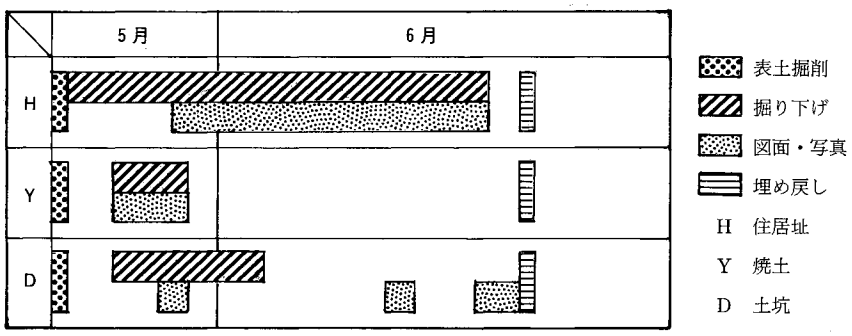


Fig. 3　調査経過図

Ⅳ　層　　序

本遺跡地は、相馬ケ原扇状地の末端上の前橋台地（前橋泥流層と前橋泥流層が侵食された所に堆積する前橋泥炭層、さらにそれらを覆う総社砂層から成り立っている）に立地している。そのことは、標準土層図が示すように前橋泥炭層の下に相馬ケ原扇状地堆積物が認められることから窺える。なお、今回の調査区においては、深堀を実施していないので、前回までの標準土層を参考とした。

Ⅰ層：耕作土。暗褐色細砂層。

II層：黄褐色細砂層。

III層：総社砂層。(縄文時代に形成)

a…明黄褐色細砂層

b…鈍い黄橙色粗砂層

c…鈍い黄褐色微砂層

d…黄褐色細砂層

e…鈍い黄褐色シルト層

f…灰黄色シルト層

g…暗褐色微砂層

h…暗灰黄色細砂層

i…黄褐色微砂層

j…オリーブ褐色シルト層

k…鈍い黄褐色粘土層

l…黄褐色シルト層

m…鈍い黄褐色粘土層

IV層：前橋泥炭層上部。黒褐色泥炭層。

As－Sj（約11000年前）を含む。

V層：相馬ケ原扇状地堆積物。オリーブ褐色砂礫層。

As－YP（約13000～14000年前）を含む。

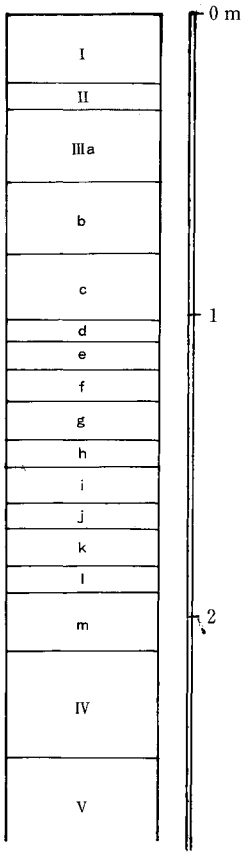


Fig. 4 標準土層図

V 遺構と遺物

1 住居址

H－1号住居址（Fig. 7，PL2）

(位置) X2・3－Y0・1G **(重複)** D－1、Y－3・4に切られる。**(形状)** 北側と西側が調査区外のため不明。**(規模)** 長軸(3.10)×短軸(1.20)m。確認面までの壁高16cm。**(面積)** (4.15)m² **(方位)** N－14°－W **(覆土)** 4層に細分できる。**(竈址)** 東壁中央よりやや南寄りに検出。**(遺物)** 総数202点の遺物が出土。このうち図示したものは4個体。**(備考)** 古墳時代

H－2号住居址（Fig. 7，PL2）

(位置) X2・3－Y2・3G **(重複)** H－10、H－11を切る。**(形状)** 南側が撹乱、西側が調査区外のため不明。**(規模)** 長軸(4.10)×短軸(2.90)m。確認面までの壁高22cm。**(面積)** (10.72)m² **(方位)** N－9°－E **(覆土)** 4層に細分できる。**(竈址)** 東壁中央やや南寄りに検出。**(遺物)** 総数813点の遺物が出土。このうち図示したものは7個体。**(備考)** 平安時代

H－3号住居址（欠番）

H－4号住居址（Fig. 8，PL2）

（**位置**）X2－Y4G（**重複**）H－5、H－6に切られる。（**形状**）南側が調査区外のため不明。（**規模**）長軸（2.06）×短軸（0.9）m。確認面までの壁高不明。（**面積**）不明（**方位**）不明（**覆土**）2層に細分できる。（**竈址**）東壁に検出。（**遺物**）総数317点の遺物が出土。このうち図示したものは2個体。（**備考**）平安時代

H－5号住居址（Fig. 8，PL3）

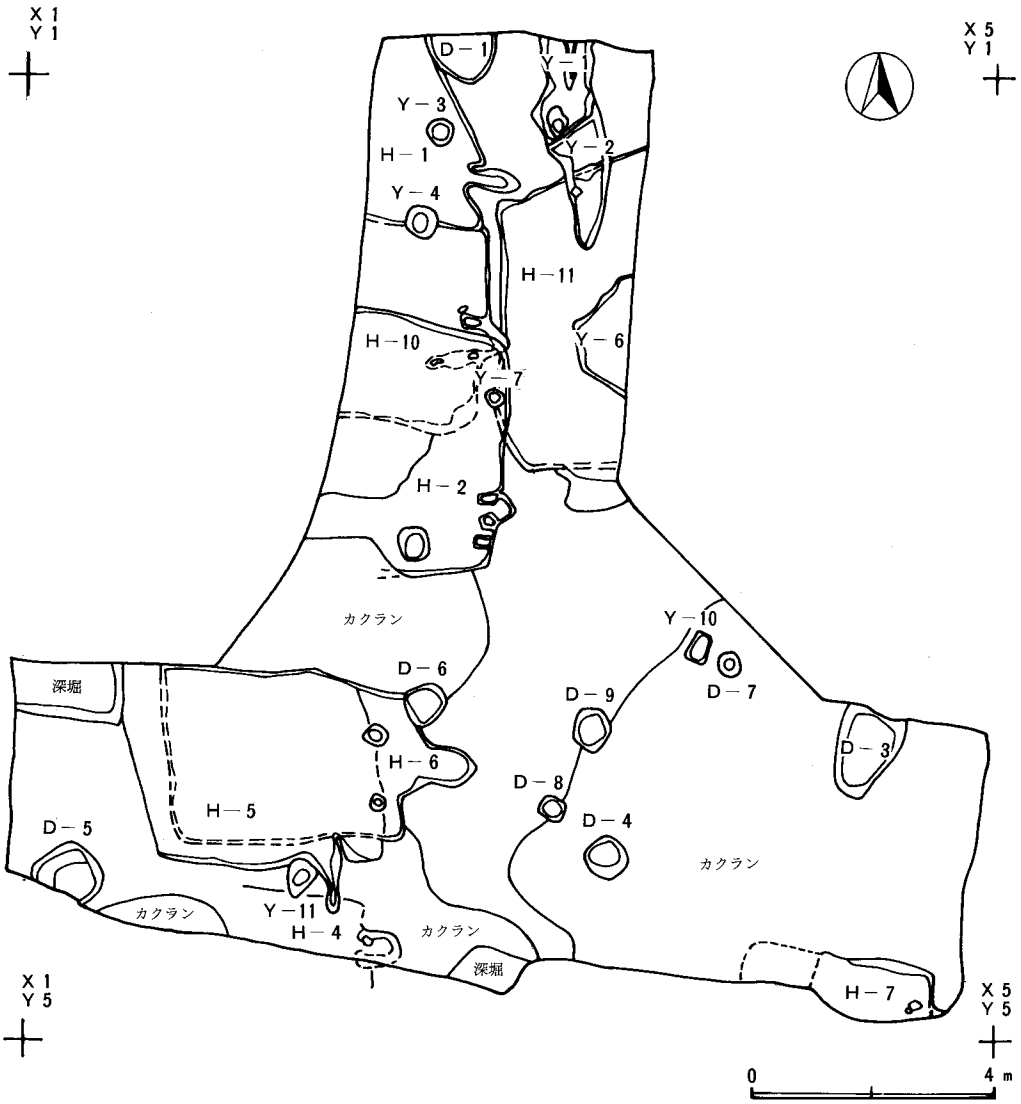


Fig. 5　元総社明神遺跡XIII全体図

（位置） Ｘ１・２－Ｙ３・４Ｇ **（重複）** Ｈ－４を切り、Ｈ－６に切られる。**（形状）** 北側が撹乱のため不明。**（規模）** 長軸(3.98)×短軸(3.24)ｍ。確認面までの壁高17cm。**（面積）** (11.94)㎡ **（方位）** Ｎ－15°－Ｗ **（覆土）** ６層に細分できる。**（竈址）** 南壁やや東よりに検出。**（遺物）** 総数277点の遺物が出土。このうち図示したものは６個体。**（備考）** 平安時代

Ｈ－６号住居址（Ｆig. ９，ＰＬ３）

（位置） Ｘ２－Ｙ３・４Ｇ **（重複）** Ｈ－４、Ｈ－５を切る。**（形状）** 北側が撹乱のため不明。**（規模）** 長軸(3.70)×短軸(2.94)ｍ。確認面までの壁高９cm。**（面積）** 10.87㎡ **（方位）** Ｎ－９°－Ｗ **（覆土）** ６層に細分できる。**（竈址）** 東壁に検出。**（遺物）** 総数236点の遺物が出土。このうち図示したものは３個体。**（備考）** 平安時代

Ｈ－７号住居址（Ｆig. ９，ＰＬ３）

（位置） Ｘ４－Ｙ４Ｇ **（形状）** 南側が調査区外のため不明。**（規模）** 長軸（3.14）×短軸（1.0）ｍ。確認面までの壁高21cm。**（面積）** (1.19) ㎡ **（覆土）** ４層に細分できる。**（竈址）** 東壁に検出。**（遺物）** 総数３点が出土。このうち図示したものは２個体。**（備考）** 奈良時代

Ｈ－８号住居址（欠番）

Ｈ－９号住居址（欠番）

Ｈ－10号住居址（Ｆig. 10，ＰＬ３）

（位置） Ｘ２・３－Ｙ１・２Ｇ **（重複）** Ｈ－２に切られ、Ｈ－11を切る。**（形状）** 西側が調査区外のため不明。**（規模）** 長軸(3.20)×短軸(2.20)ｍ。確認面までの壁高21cm。**（面積）** (6.60)㎡ **（方位）** Ｎ－８°－Ｅ **（覆土）** １層に細分できる。**（竈址）** 東壁中央やや南寄りに検出。**（遺物）** 総数1197点の遺物が出土。このうち図示したものは11個体。**（備考）** 奈良時代

Ｈ－11号住居址（Ｆig. 10，ＰＬ４）

（位置） Ｘ２・３－Ｙ１・２Ｇ **（重複）** Ｈ－２、Ｈ－10に切られる。**（形状）** 東側が調査区外のため不明。**（規模）** 長軸(4.22)×短軸(2.8)ｍ。確認面までの壁高14.25cm。**（面積）** 10.15㎡ **（方位）** Ｎ－２°－Ｅ **（覆土）** ３層に大別できる。**（遺物）** 総数273点の遺物が出土。このうち図示したものは４個体。**（備考）** 古墳時代

２　**焼土**（Ｆig. 11，ＰＬ４）　Ｔab. ２参照。８基確認。時代は不明。

３　**土坑**（Ｆig. 11，ＰＬ４）Ｔab. ３参照。８基確認。

４　**グリッド出土の遺物**（ＰＬ４）

表土掘削時やプラン確認時に、プラン確認が難しいために、グリッドで取り上げた遺物がある。総数983点が出土している。図示したものは５個体。

Ⅵ　ま　と　め

1．平成８年度調査のまとめ

①．住居址

平成８年度の調査では８軒の住居址が検出された。プラン確認時において、Ｈ－３・８号住居址は焼土と堅緻面を検出し、Ｈ－９号住居址は堅緻面を検出したが、住居址として確認できなかった。住居同士の切り合いや、撹乱で壊されていたため、竈の焼土範囲から住居の壁や床面を探す状態であった。古墳時代の住居と平安時代の住居との切り合いもあり、土器の混入も多く、時代決定の要素としては、竈の形状が大きな決め手となった。Ｈ－11号住居址は排水管設置工事の際、竈を検出した。

出土遺物のなかで、Ｈ－10号住居址から須恵器の蓋が２枚重なって出土した。また、円面硯の破片がＨ－５号住居址から出土した。墨書土器の破片がＨ－２号住居址から出土した。破片であるため文字ははっきりしないが「介」の可能性が高い。Ｈ－７号住居址からは、畿内式暗文土師器が底部を上にして出土した。８世紀中頃以降の所産時期の土器である。

②．焼土

調査開始当初は、住居址の竈の焼土としてプラン確認をしたが、竈として確認できなかったものを焼土址とした。８基検出した。出土遺物はほとんど無かった。時代決定は難しい。切り合い関係からすると住居址よりは新しいものといえる。

③．土坑

調査時に、土坑として８基検出した。土器片が出土した土坑もあるが、混入した遺物と思われるため、時代決定は難しい。Ｄ－１号土坑は、調査区域の北壁から南側半分程を検出、墓坑であった。Ｄ－２号土坑はＨ－２号住居址の貯蔵穴とした。

2．元総社明神遺跡のまとめ

昭和57年度から始まった元総社明神遺跡の調査も今年度で終了した。調査面積は26,928m²になり、検出された遺構や遺物も古墳時代から近世に至り、元総社地区の歴史の解明に大きく貢献した。そこで、細部の調査内容はそれぞれの報告書に掲載されているので、ここでは、おおまかな結果を記述してみたい。検出遺構は、古墳時代の住居址約141軒、奈良・平安時代の住居址約303軒、溝約137条等であった。古墳時代と平安時代の水田址も検出されており、国府の範囲を考えるうえで、貴重な発見といえる。

古墳時代の住居址は徳蔵寺から東側と北東方向に多く検出されている。国府建設に伴い、奈

良・平安時代の住居の建築範囲が規制されたために、古墳時代の住居址の残り方がよかった可能性もある。閑泉樋遺跡で検出されたN－89°－Wの方向性をもつ溝と南北方向の溝（13・11・8・6・3・14トレンチ）は、国府域を画する大溝と考えられる。上野国府の推定域は諸説あるが、今後の国府域研究に役立つものといえる。

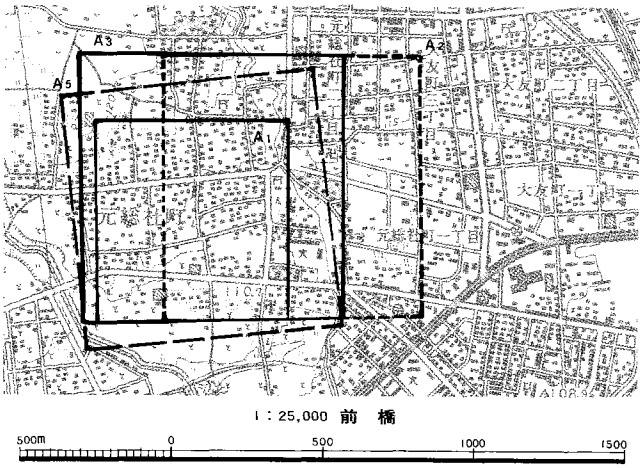


Fig. 6 上野国府学説

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦、陶磁器、石器、石製品等多岐にわたる。国府に関係すると思われる遺物も多く出土している。墨書土器・硯等の出土した住居址もあり、官人の居留した可能性が考えられる。その中でも特に、木器の「人形」(Yトレンチ・1990）は、国府の行事と深い関係が窺える。蒼海城に関連する遺物として天目茶碗（31トレンチ・1992）が井戸の中から出土している。検出された遺構や遺物から国府や蒼海城に関係するものがある。元総社明神遺跡以外にも、当地区で発掘調査が行われており、それらの遺跡の結果を踏まえて研究することで、元総社地区の歴史の解明に役立つものといえる。

元総社明神遺跡の報告書（Ⅰ～XII）で国府や蒼海城に関係する図面、表の掲載は以下の通りである。(最新の年度のもの)

上野国府に係わる諸論攷『元総社明神遺跡Ⅰ』

推定国府域における古瓦散布状況『元総社明神遺跡II』

上野国府調査の歩み『元総社明神遺跡III・IV（1986）』

元総社地区遺跡地周辺旧状想定図『元総社明神遺跡IX（1991）』

蒼海城『元総社明神遺跡X（1992）』

参考文献

閑泉樋遺跡『文化財調査報告書第13集』前橋市教育委員会1982

元総社明神遺跡Ⅰ・II　前橋市教育委員会1983・1984

元総社明神遺跡III～XII　前橋市埋蔵文化財発掘調査団1985～1994

群馬県史研究30「群馬県内出土の暗文土師器について－在地産を中心として－」桜岡正信

Tab. 1　土　器　観　察　表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録
1	H－1	坏	14.4	3.8	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	口縁部変換点に稜をもつ。口縁部横撫で。体～底部外面篦削り。内面撫で。	1
2	H－1	羽釜	－	(4.7)	①細粒②良好③にぶい橙④破片	口縁短く内傾、口唇部平坦面形成、内傾する。鍔断面U字状。口縁部～内面回転撫で。鍔貼付後の調整丁寧。	19
3	H－1	甑	[22.3]	[22.2]	①中粒②良好③にぶい黄橙④1/4	胴部若干膨らみをもつ。口縁部緩く外反する。胴部短胴か。口縁部横撫で。胴部縦位～斜位の篦削り。	38外
4	H－2	短頸壺	[15.9]	(10.0)	①細粒②良好③オリーブ黒④1/4	肩部くの字状に張る。口縁短く外反、唇部上面凹状。内外面回転撫で。降灰釉付着。	89
5	H－2	高台椀	[12.4]	(3.4)	①細粒②良好③にぶい黄褐④台部	高台やや高く、外反気味に開く。体部緩く内湾するか。轆轤整形。底部右回転糸切り。高台貼付後再調整。内面内黒処理後篦磨き。	5
6	H－2	椀	12.4	5.5	①中粒②不良③褐灰④完形	器肉厚く、だれた高台貼付。体部外傾。口縁で外反。小形器形。轆轤整形。口縁部回転撫で。底部右回転糸切り後、台形状の高台貼付。	120
7	H－2	墨書土器	－	－	①細粒②良好③黒褐④破片	厚0.7cmの破片。器肉薄い。底部外面墨書判読不明。轆轤整形。底部回転糸切り。	覆土
8	H－2	羽口	－	(7.1)	①粗粒②良好③にぶい橙④破片	側面面取り状に撫で。器面赤色化。胎土小石含み粗。内面中央に穿孔痕残る。	72
9	H－2	高坏	[13.4]	(7.4)	①細粒②良好③橙④1/5	体部中位でくの字状に折れ、稜形成後、口縁外反して開く。口縁部横撫で。体部篦削り。内面撫で後、篦磨き。	108
10	H－4	坏	11.2	3.1	①細粒②良好③橙④1/2強	体部内湾、口縁部で短く内屈する。口縁部横撫で。体部上半指撫で。底部篦削り。	28
11	H－4	椀	[12.4]	4.3	①細粒②良好③にぶい橙④1/4	小形。腰部膨らみ、内湾して開く。高台短く外傾。器肉やや厚い。轆轤整形。底部高台貼付再調整。	12
12	H－5	硯	[14.1]	(3.1)	①細粒②良好③灰④破片	円面硯。海部わずかに凹む。脚側面方形状の透かしをもつ。轆轤整形。	60
13	H－5	小型甕	[14.6]	9.5	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	底部～体部球形に丸まり、口縁部短く外傾する。体部深い。口縁部横撫で。体～底部篦削り後撫でつけ状痕跡認む	143
14	H－5	灰釉椀	[14.7]	5.8	①細粒②良好③灰白④1/4	腰部膨らみ、体部深め。高台断面U字状。轆轤整形。底部回転撫で。腰部回転篦削り。見込部を除く、体部内外漬け掛け施釉。	33
15	H－5	須恵器高台椀	[15.6]	(4.1)	①細粒②良好③灰白④口縁1/4	体部緩く内湾、口縁部に至る。轆轤整形。口縁部回転撫で。体部回転篦削り再調整か。	129
16	H－5	椀	[11.2]	4.2	①中粒②良好③にぶい橙④1/5	底部小さく底上げ。体部外傾して開く。口唇部尖る。小形器形。口縁部横撫で。体部紐くり、指頭押圧痕残る。内面撫で。	69
17	H－5	瓶	(7.0)	(8.8)	①細粒②良好③灰白④破片	灰釉陶器甕形態か。肩部に丸みをもつ。轆轤整形。肩部～胴部回転篦削り。施釉は漬け掛けか。	31
18	H－6	須恵器坏	[11.4]	3.9	①細粒②良好③淡黄④1/2	外傾する口縁。轆轤整形。底部回転糸切り痕。	覆土
19	H－6	平瓦	厚さ1.7		①細粒②良好③褐灰④破片	8mm四方の格子目の叩きが4×5列残る。火を受けている。桶巻。	覆土
20	H－7	灰袖高台椀	(9.0)	(1.2)	①細粒②良好③灰白④破片	高台短い台形状。見込部施釉。内面底部平坦。轆轤整形。底部回転篦削り。施釉刷毛塗りか。	覆土
21	H－7	坏	11.6	3.7	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	体部浅く、底部平底気味に安定。体部緩く外傾。外面口縁部横撫で。体～底部篦削り。内面体部放射状、底部螺旋状篦磨き。小形。暗文。	1
22	H－10	甕	(13.8)	(6.6)	①細粒②良好③灰褐色④口縁1/4	S字状口縁。石田川式期。肩部張り、口縁外反、凹状形成。器肉薄い。口縁部撫でつけ肩部縦位の刷毛目。内面刷毛目、指撫で。	89
23	H－10	須恵器壺蓋	[16.1]	2.6	①細粒②良好③灰④1/3	薬壺型短頸壺に対応。天井部平坦面形成。端部三角形状に突出後、鍔水平に張り出す。轆轤整形。天井部回転篦削り。小形の環状摘。	110
24	H－10	須恵器坏	[14.1]	(3.5)	①細粒②良好③灰白④1/3	底部幅広、端部丸みをもつ。体部直立気味に立ち上がる。口唇煤状付着物。轆轤整形。底部篦起こしか。腰部再調整。	22
25	H－10	須恵器椀	13.8	4.1	①細粒②良好③褐灰④ほぼ完形	小振り。腰部張り、体部浅く外傾。削り出し高台。轆轤整形。口縁部回転撫で。腰部再調整。底部回転篦削り。	67
26	H－10	須恵器蓋	[13.9]	(2.3)	①細粒②良好③浅黄④1/8	天井部平坦面形成後緩傾斜する。口縁内側に返りをもつ。轆轤整形。天井部回転篦削り。環状の摘。	120
27	H－10	須恵器蓋	16.8	3.4	①細粒②良好③灰白④4/5	体部浅く外傾、口縁短く内屈。大型の環状摘貼付。轆轤整形。天井部回転篦削り。内面中央篦記号？「－」	117
28	H－10	須恵器蓋	19.4	4.7	①細粒②良好③灰黄④4/5	大振り。天井部～体部緩く湾曲、口縁部短く直立。小形の環状摘貼付。轆轤整形。天井部回転篦削り。内面中央篦記号？「二」	118
29	H－10	長頸瓶	－	(5.0)	①中粒②良好③灰④台部1/3	胴下半細身。脚部段状に括れ、外反する。底部中央円形状に剝落。胴下半手持ち篦削り。脚貼付後、外面強い撫でつけ。	112
30	H－10	羽口	－	(6.4)	①細粒②良好③にぶい黄橙④破片	側面端部灰色～橙色への火受けにより焼成変化を認む。内面孔の痕跡顕著。	覆土

31	H－10	坩堝	(13.0) (6.7)	①粗粒②良好③暗灰黄④破片	手捏ねによる成形か。外面紐状痕跡残る。指頭痕顕著。口縁一部片口状に押圧痕。器内面海綿状。濃緑色の粒子付着。	70
32	H－11	坏	11.4 3.8	①細粒②良好③橙④1／2	小形。体～底部緩く内湾。わずかに稜形成後、口縁部短く外傾。口縁部横撫で。体～底部篦削り。	17-1
33	H－11	坏	[12.3] [3.9]	①細粒②良好③橙④1／3	小形。体～底部扁球形、口縁部短く外傾する。口縁部横撫で。体～底部篦削り。	17-2
34	H－11	坏	12.0 4.0	①中粒②良好③橙④完形	模倣坏。底部緩湾曲、変換点に稜。口縁若干外傾して開く。口縁部横撫で。体～底部篦削り。内面撫で。	17
35	H－11	甕	16.6 (8.1)	①中粒②良好③にぶい橙④上部のみ	小形。長胴形器形、口縁部で外反する。口縁部横撫で。胴部外面縦位篦削り。内面篦撫で。	18
36	34トレ	須恵器盤	[18.6] 3.9	①中粒②良好③褐灰④1／4	体部ハの字に強く外傾、口縁部変換点で折れ、直立気味に外反。唇部平坦。高台高く外傾して開く。轆轤整形。腰部～底部外周、高台貼付後再調整。	22

注）1．胎土は細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0mm～1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。

2．焼成は極良、良好、不良の3段階評価。

3．色調は土器外面を観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原 1995）によった。

4．大きさの単位はcmであり、現存値を（ ）、復元値を［ ］で示した。その他の小片については所属部位を記載した。

Tab. 2 石器・石製品観察表

番号	出土位置	器 種	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	備 考
①	H－1	石製模造品	2.0	2.3	0.8	6.6	滑 石	一部欠損。
②	X2－Y2G	臼 玉	1.5	1.4	0.7	1.6	滑 石	一部欠損。
③	X3－Y2G	臼 玉	0.9	0.8	0.6	0.6	滑 石	完形。
④	H－2	打 斧	6.7	4.6	1.6	71.0	頁 岩	短冊型。
⑤	H－6	磨・敲石	14.1	5.8	4.7	660	安山岩	上部と下部に使用痕。
⑥	H－10	敲 石	8.0	6.1	4.5	302	安山岩	下部欠損。上部に使用痕。
⑦	D－1	砥 石	3.6	4.1	4.3	76.0	砥沢石	破片。3面使用
⑧	X3－Y2G	敲 石	10.0	8.8	3.5	496	安山岩	円礫。上部と下部に使用痕。
⑨	X2－Y2G	敲 石	19.0	7.1	5.2	1350	安山岩	上部と下部に使用痕。

注）表の記載で、大きさと重さについての単位はcm，gである。

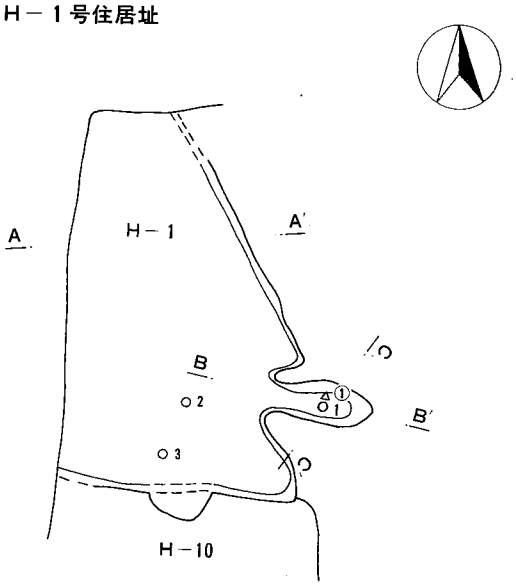
Tab. 3 焼 土 観 察 表

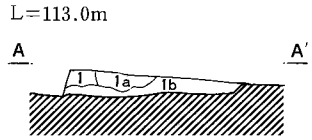
遺構名	位 置	形 状	長 径	短 径	深 さ	備 考
Y－1	X3－Y0・1G	不整形	174cm	70cm	31cm	遺物3点出土。
Y－2	X3－Y1G	三角形	246	105	36	H－11を切る。遺物13点出土。
Y－3	X2－Y1G	楕円形	54	42	28	H－1を切る。遺物3点出土。
Y－4	X2－Y1G	円 形	52	50	49	H－1・10を切る。遺物13点出土。
Y－5	欠 番	－	－	－	－	
Y－6	X3－Y1・2G	半 円	203	100	26	H－11を切る。遺物14点出土。
Y－7	X2－Y2G	円 形	28	27	14	H－2を切る。遺物4点出土。
Y－8	欠 番	－	－	－	－	
Y－9	欠 番	－	－	－	－	
Y－10	X3－Y3G	長方形	50	30	7	
Y－11	X2－Y4G	楕円形	67	45	26	遺物11点出土。

Tab. 4 土 坑 観 察 表

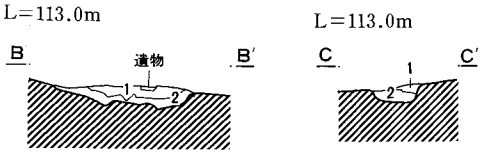
遺構名	位 置	形 状	長 径	短 径	深 さ	備 考
D－1	X2－Y0・1G	半円形	140cm	78cm	39cm	H-1を切る。遺物7点出土。
D－2	X2－Y2・3G	円 形	58	48	38	H-2の貯蔵穴。
D－3	X4－Y3・4G	楕円形	140	96	30	遺物46点出土。
D－4	X3－Y4G	円 形	68	66	44	
D－5	X1－Y4G	半円形	112	82	12	遺物13点出土。
D－6	X2－Y3G	円 形	65	58	30	遺物6点出土。
D－7	X3－Y3G	円 形	38	34	34	
D－8	X3－Y3・4G	円 形	46	40	82	遺物80点出土。
D－9	X3－Y3G	円 形	68	58	53	

H－1号住居址





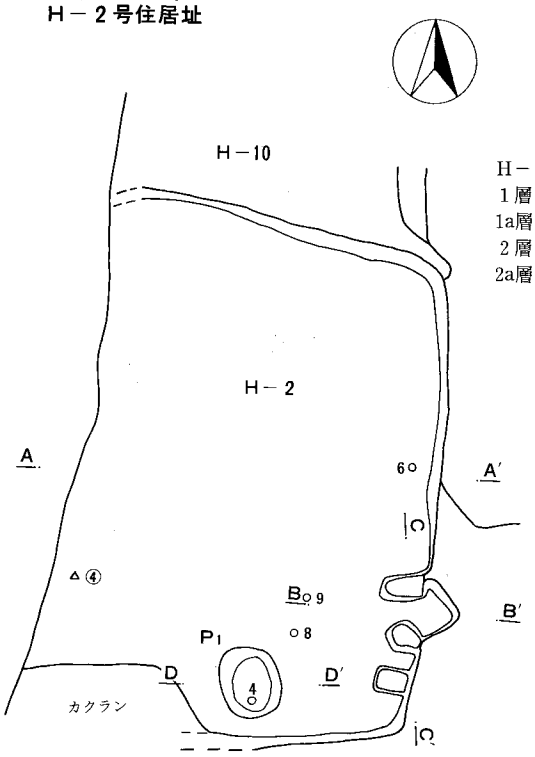
H－1号住居址層序説明
1層　黒褐色細砂層。焼土ブロックわずかに含む。
1a層　黒褐色細砂層。焼土ブロック30％含む。
1b層　褐色微砂層。焼土5％含む。

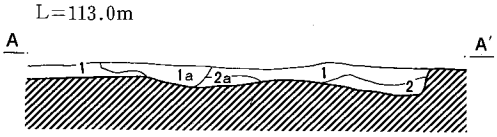


H－1号住居址竈層序説明
1層　暗褐色微砂層。焼土と灰40％含む。
2層　黒褐色細砂層。砂層粒子わずかに含む。

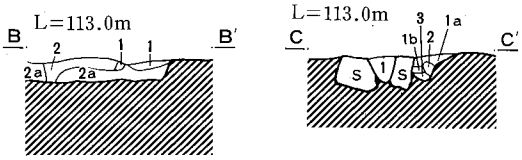
0　1：60　2 m

H－2号住居址

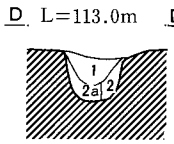




H－2号住居址層序説明
1層　暗褐色細砂層。Hr－FPわずかに含む。
1a層　褐色細砂層。
2層　黒褐色細砂層。Hr－FP10～15％含む。
2a層　暗褐色細砂層。Hr－FP5％含む。砂層粒子10％帯状に入る。



H－2号住居址竈層序説明
1層　黒褐色細砂層。軽石をわずかに含む。
1a層　黒褐色細砂層。焼土ブロックわずかに含む。
1b層　黒褐色細砂層。褐色の微砂わずかに含む。
2層　褐色微砂層。焼土ブロック3％含む。
2a層　黒褐色細砂層。焼土ブロックわずかに含む。
3層　黒褐色細砂層。締まり無。

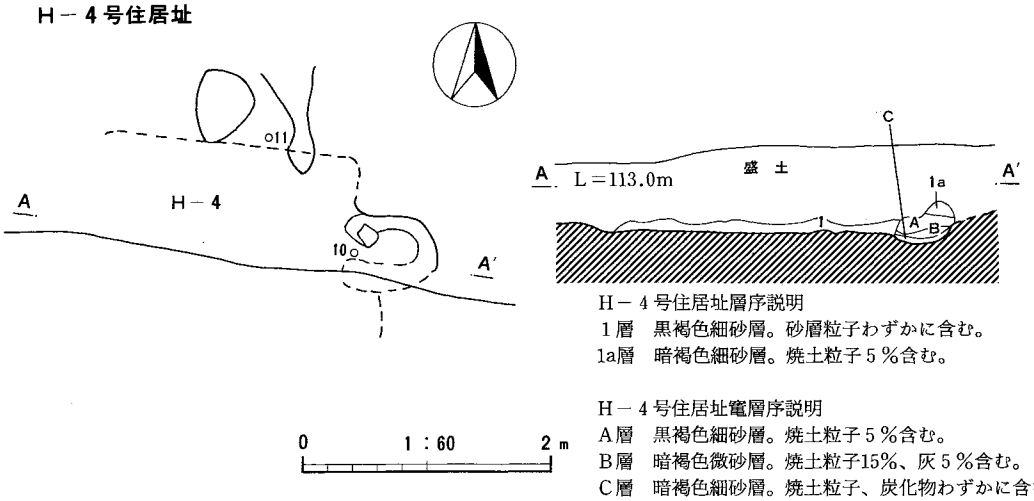


H－2号住居址貯蔵穴層序説明
1層　暗褐色細砂層。砂層粒子10％含む。
2層　褐色細砂層。数cm大の砂層がブロック状に入る。
2a層　黒褐色細砂層。砂層をわずかに含む。

0　1：60　2 m

Fig. 7　H－1・2号住居址

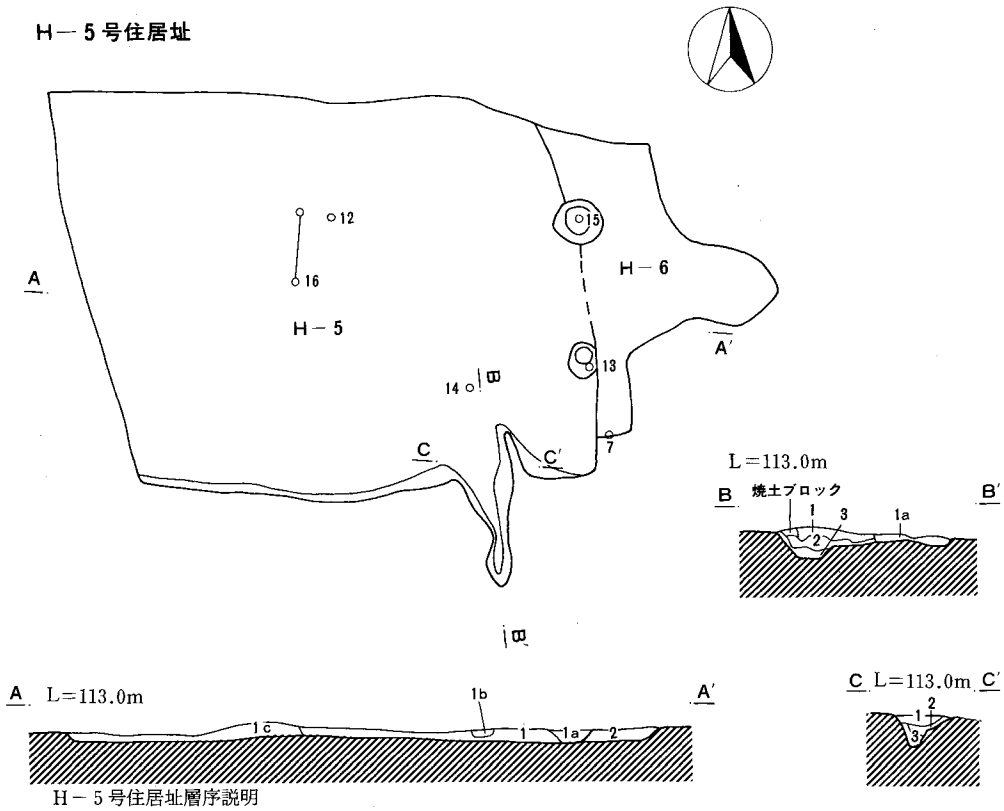
H－4号住居址



H－4号住居址層序説明
1層　黒褐色細砂層。砂層粒子わずかに含む。
1a層　暗褐色細砂層。焼土粒子5％含む。

H－4号住居址竈層序説明
A層　黒褐色細砂層。焼土粒子5％含む。
B層　暗褐色微砂層。焼土粒子15％、灰5％含む。
C層　暗褐色細砂層。焼土粒子、炭化物わずかに含む。

H－5号住居址



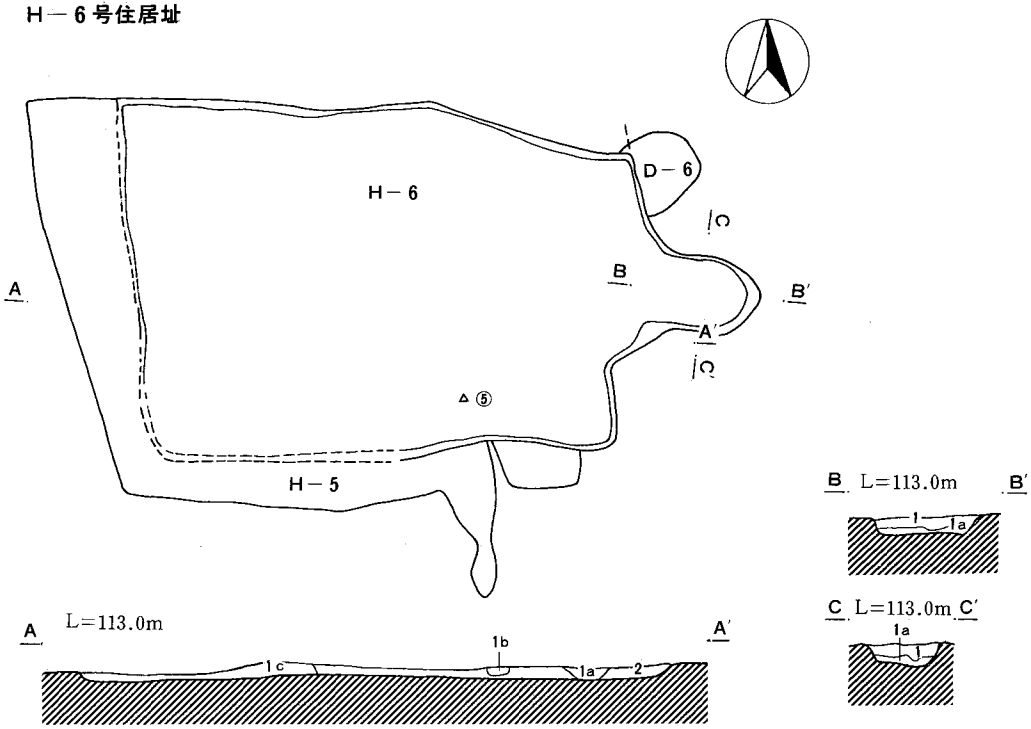
H－5号住居址層序説明
1層　褐色細砂層。Hr－FP5％含む。
1a層　暗褐色細砂層。1cm大の砂層ブロックをわずかに含む。
1b層　褐色細砂層。1層よりHr－FPが少ない。
1c層　暗褐色細砂層。Hr－FP、砂層粒子をわずかに含む。
2層　黒褐色細砂層。焼土ブロックわずかに含む。

H－5号住居址竈層序説明
1層　黒褐色細砂層。焼土わずかに含む。
1a層　暗褐色細砂層。焼土わずかに含む。
2層　暗褐色細砂層。焼土ブロック10％含む。
3層　褐色細砂層。焼土ブロックわずかに含む。

0　1：60　2 m

Fig. 8　H－4・5号住居址

H－6号住居址



0　1：60　2 m

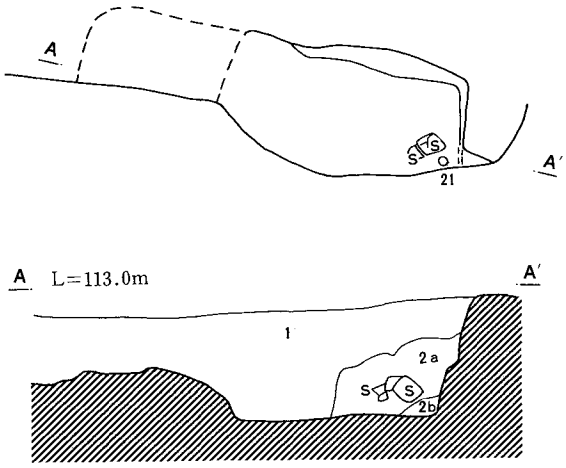
H－6号住居址層序説明

1a層　暗褐色細砂層。1cm大の砂層ブロックをわずかに含む。
1b層　褐色細砂層。1層よりHr－FPが少ない。
1c層　暗褐色細砂層。Hr－FP、砂層粒子をわずかに含む。
2層　黒褐色細砂層。焼土ブロックわずかに含む。

H－6号住居址竈層序説明

1層　褐色細砂層。焼土40%含む。
1a層　黒褐色細砂層。焼土わずかに含む。

H－7号住居址

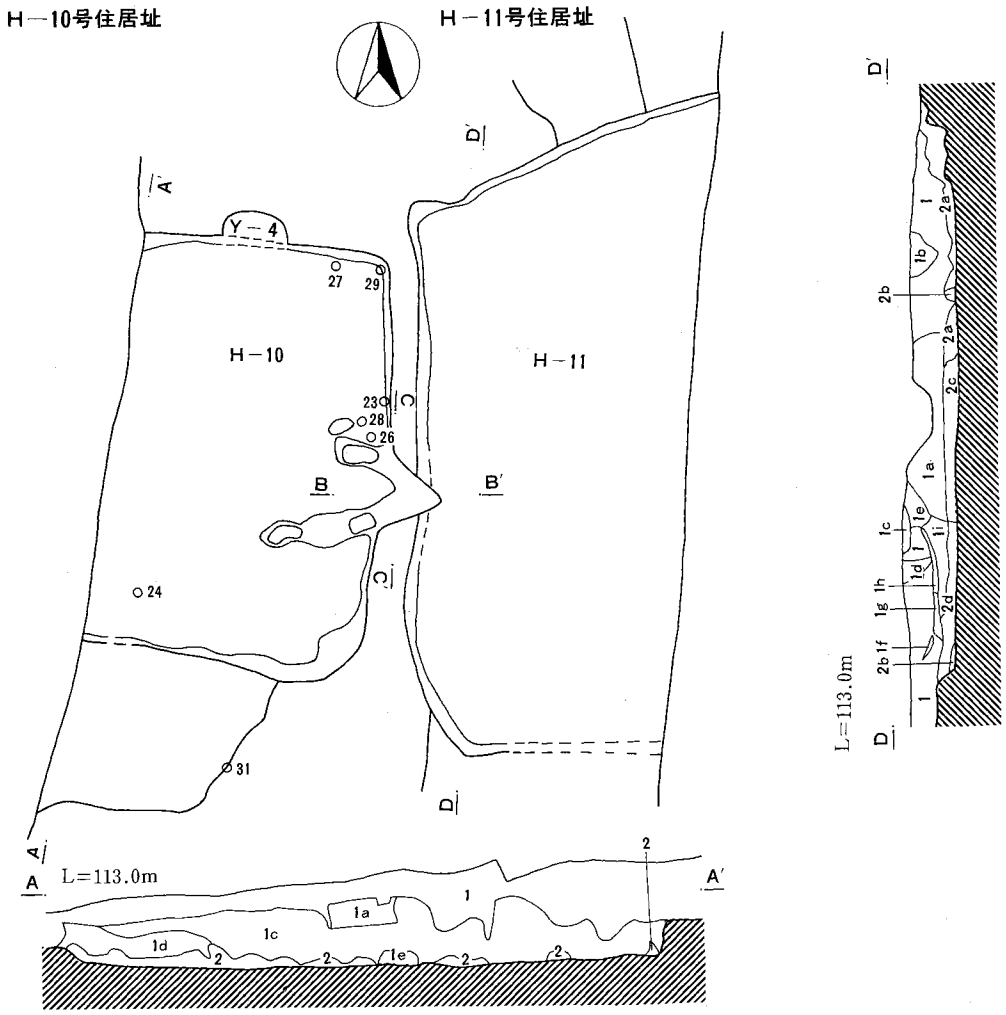


H－7号住居址層序説明

1層　黒褐色細砂層。表土。木の根、ゴミ等を含む。
2a層　黒褐色細砂層。炭をわずかに含む。
2b層　黒褐色細砂層。焼土ブロック10%含む。

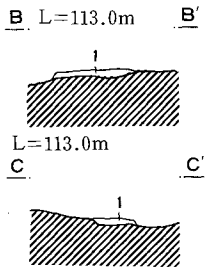
0　1：60　2 m

Fig. 9　H－6・7号住居址



H－10号住居址層序説明

1層　黒褐色細砂層。表土。木の根、ゴミ等を含む。
1a層　黒褐色細砂層。軽石10%含む。
1c層　黒褐色細砂層。焼土ブロックわずかに含む。火山灰10%含む。
1d層　黒褐色細砂層。焼土ブロック10%含む。
1e層　黒褐色微砂層。粘性あり。
2層　褐色微砂層。総社砂層と黒色土との混じり。



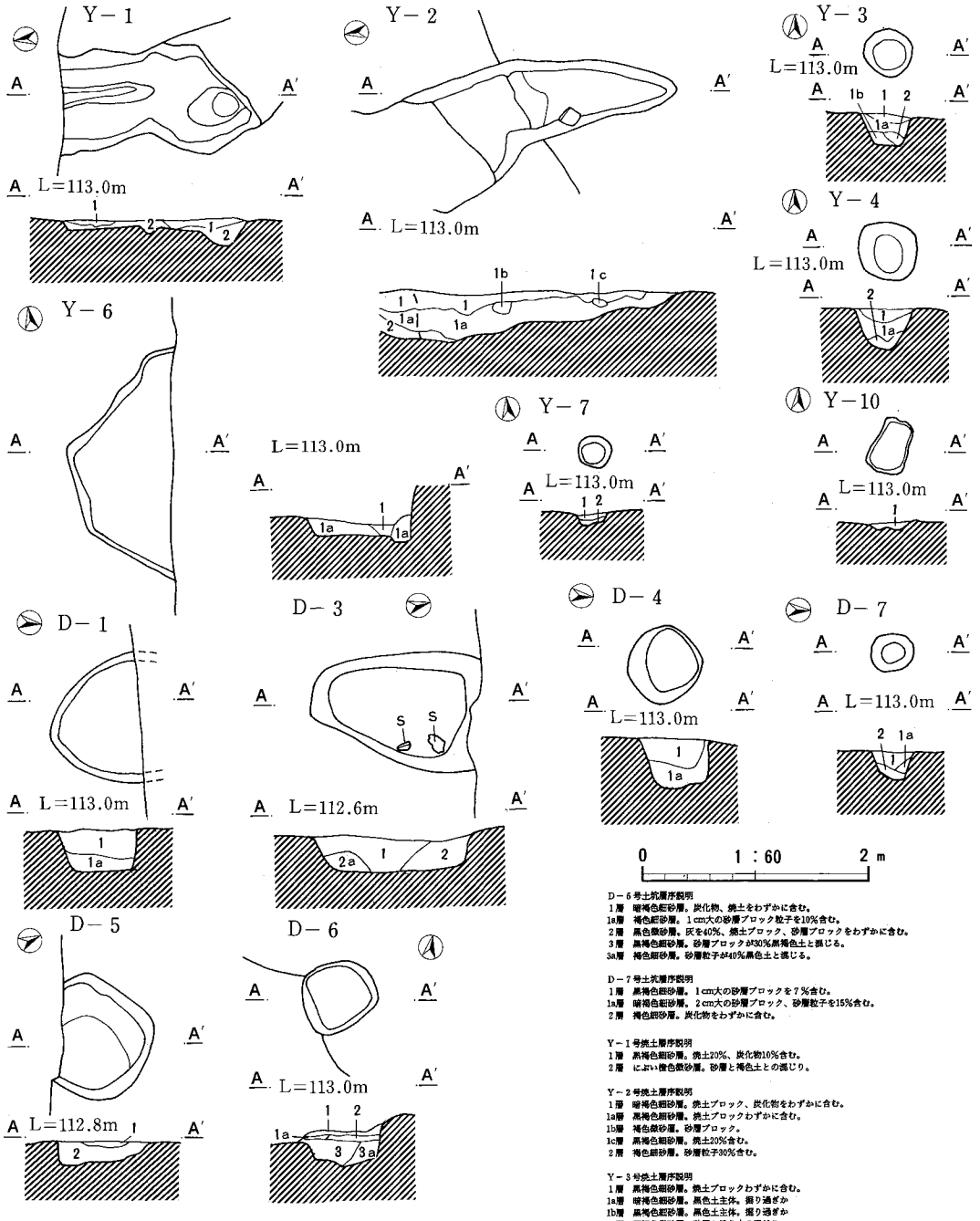
H－10号住居址竈層序説明

1層　黒褐色細砂層。焼土30%含む。

H－11号住居址層序説明

1層　褐色細砂層。Ｈｒ－ＦＰを10%含む。炭化物わずかに含む。
1a層　褐色細砂層。Ｈｒ－ＦＰをわずかに含む。
1b層　暗褐色細砂層。炭化物をわずかに含む。
1c層　灰褐色細砂層。焼土10%含む。
1d層　暗褐色細砂層。砂層ブロックわずかに含む。
1e層　灰褐色細砂層。Ｈｒ－ＦＰを10%含む。
1f層　にぶい赤褐色微砂層。砂層の焼けたかたまりを含む。
1g層　黒褐色細砂層。黒色土と砂層土の混じり。
1h層　褐色細砂層。砂層粒子15%含む。
1i層　黒褐色細砂層。砂層粒子15%含む。
2a層　黒褐色細砂層。灰10%含む。
2b層　黒褐色細砂層。赤く焼けた砂層ブロックを含む。
2c層　暗褐色粗砂層。１cm大の砂層ブロックわずかに含む。
2d層　黒褐色細砂層。砂層粒子10%含む。

Fig.10　H－10・11号住居址



D－6号土坑層序説明
1層　暗褐色細砂層。炭化物、焼土をわずかに含む。
1a層　褐色細砂層。1cm大の砂層ブロック粒子を10%含む。
2層　黒色微砂層。灰を40%、焼土ブロック、砂層ブロックをわずかに含む。
3層　黒褐色細砂層。砂層ブロックが30%黒褐色土と混じる。
3a層　褐色細砂層。砂層粒子が40%黒色土と混じる。

D－7号土坑層序説明
1層　黒褐色細砂層。1cm大の砂層ブロックを7%含む。
1a層　暗褐色細砂層。2cm大の砂層ブロック、砂層粒子を15%含む。
2層　褐色細砂層。炭化物をわずかに含む。

Y－1号焼土層序説明
1層　黒褐色細砂層。焼土20%、炭化物10%含む。
2層　にぶい橙色微砂層。砂層と褐色土との混じり。

Y－2号焼土層序説明
1層　暗褐色細砂層。焼土ブロック、炭化物をわずかに含む。
1a層　黒褐色細砂層。焼土ブロックわずかに含む。
1b層　褐色微砂層。砂層ブロック。
1c層　黒褐色細砂層。焼土20%含む。
2層　褐色細砂層。砂層粒子30%含む。

Y－3号焼土層序説明
1層　黒褐色細砂層。焼土ブロックわずかに含む。
1a層　暗褐色細砂層。黒色土主体。掘り過ぎか
1b層　黒褐色細砂層。黒色土主体。掘り過ぎか
2層　明褐色微砂層。砂層と黒色土の混じり。

Y－4号焼土層序説明
1層　黒褐色細砂層。焼土ブロック10%含む。
1a層　黒褐色細砂層。焼土ブロックわずかに含む。
2層　明褐色微砂層。砂層と黒色土の混じり。

Y－6号焼土層序説明
1層　黒褐色細砂層。焼土粒子わずかに含む。
1a層　暗褐色細砂層。砂層ブロック10%含む。

Y－7号焼土層序説明
1層　暗褐色細砂層。焼土と炭化物を10%含む。
2層　褐色細砂層。黒色土主体。

Y－10号焼土層序説明
1層　黒褐色細砂層。焼土30%含む。

D－1号土坑層序説明
1層　黒褐色細砂層。As－Bを30%含む。
1a層　暗褐色細砂層。As－Bを30%含む。炭化物、灰をわずかに含む。

D－3号土坑層序説明
1層　黒褐色細砂層。黒色土主体。
2層　暗褐色細砂層。黒色土に2～3mm大でにぶい橙の砂層粒子が30%混じる。
2a層　黒褐色細砂層。黒色土に数cm大の砂層ブロックが20%混じる。

D－4号土坑層序説明
1層　黒褐色細砂層。
1a層　暗褐色細砂層。褐色砂層粒子を15%含む。

D－5号土坑層序説明
1層　黒褐色細砂層。黒色炭化物と焼土を含む。
2層　暗褐色細砂層。砂層ブロックを15%、Hr－FPを5%含む。

Fig.11　Y－1～4・6・7・10号焼土、D－1・3～7号土坑

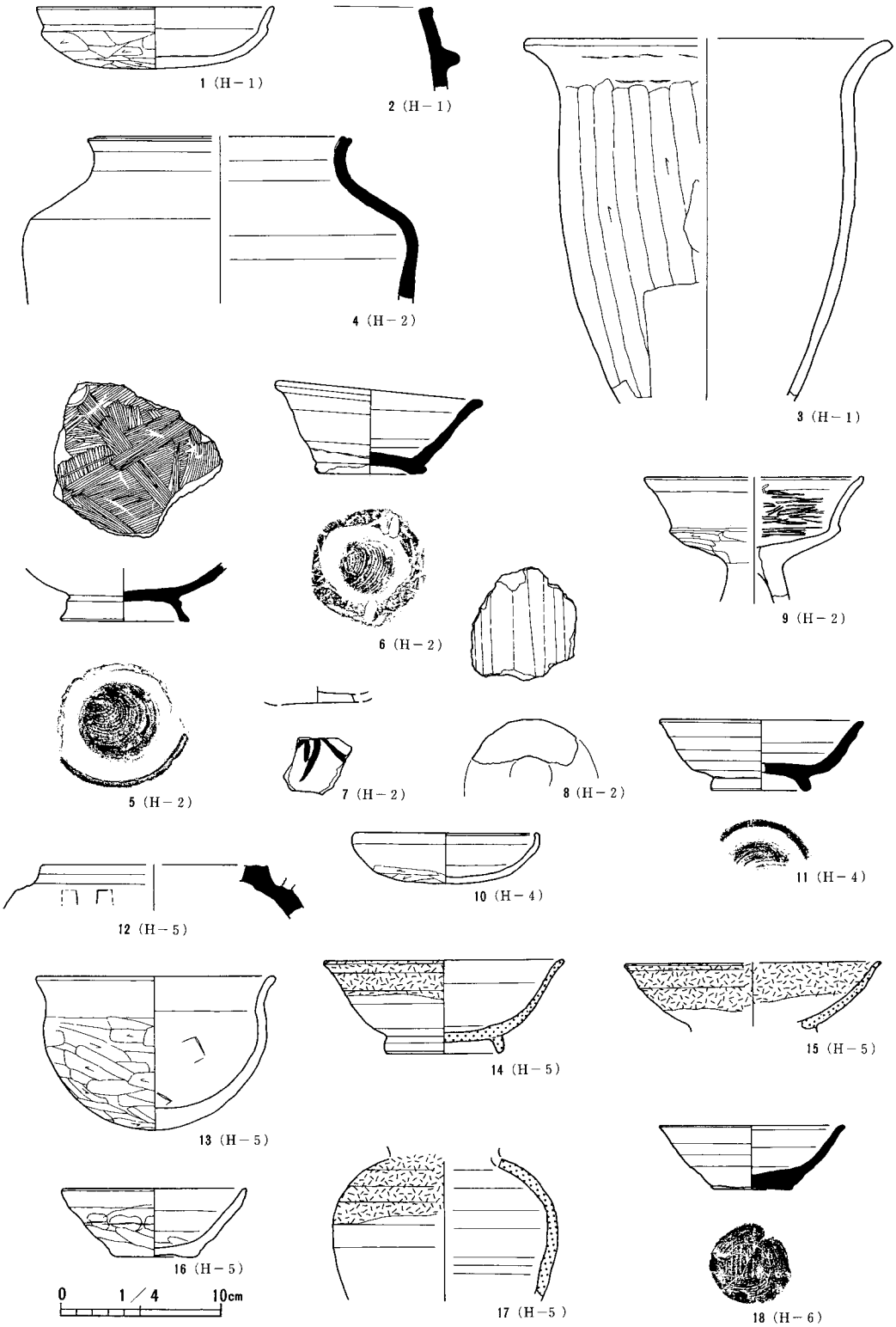

1 (H－1)
2 (H－1)
3 (H－1)
4 (H－2)
5 (H－2)
6 (H－2)
7 (H－2)
8 (H－2)
9 (H－2)
10 (H－4)
11 (H－4)
12 (H－5)
13 (H－5)
14 (H－5)
15 (H－5)
16 (H－5)
17 (H－5)
18 (H－6)
0 1／4 10cm

Fig.12 出土遺物 (1)

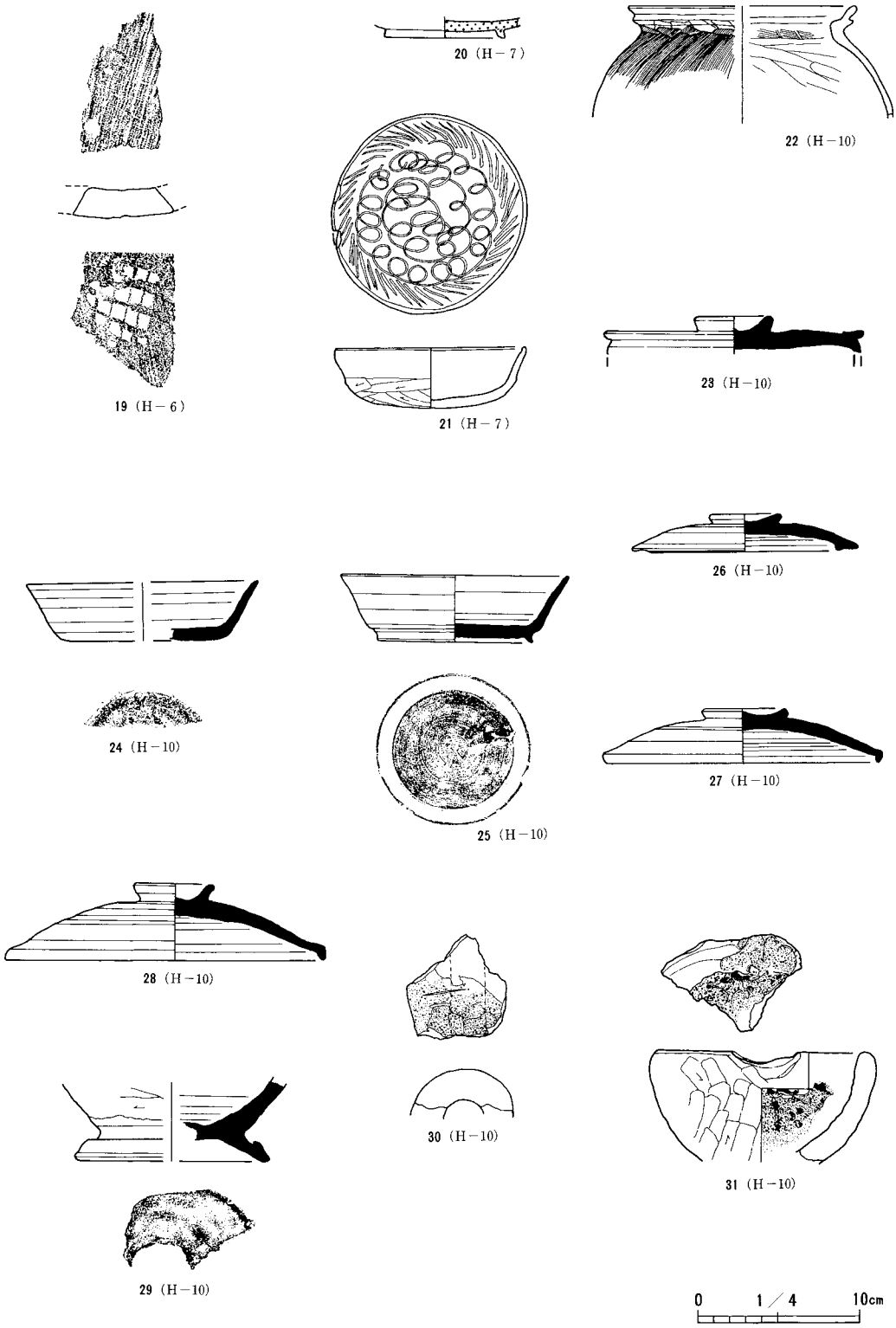

19（H－6）
20（H－7）
21（H－7）
22（H－10）
23（H－10）
24（H－10）
25（H－10）
26（H－10）
27（H－10）
28（H－10）
29（H－10）
30（H－10）
31（H－10）
0 1／4 10cm

Fig.13　出土遺物　(2)

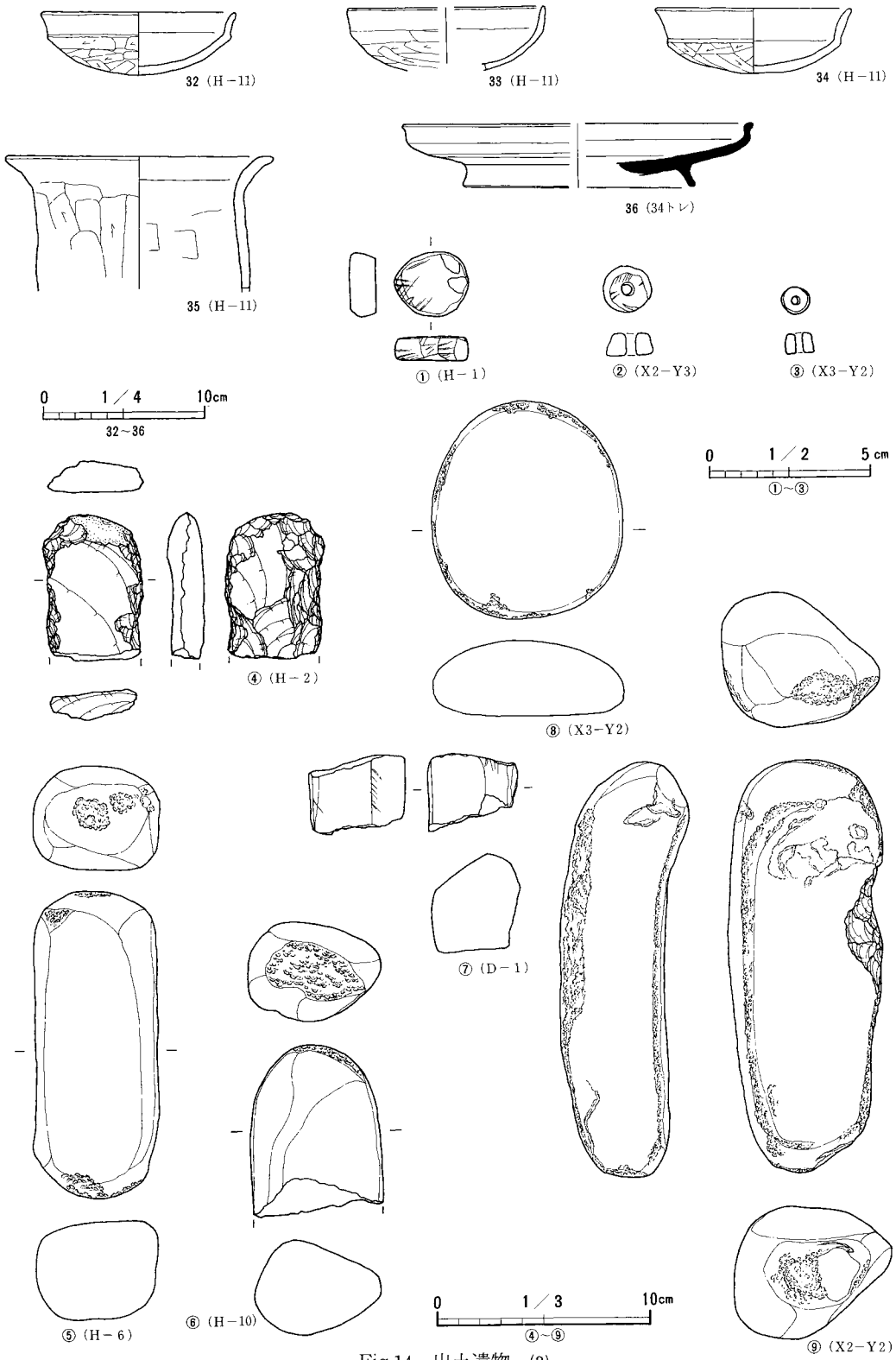

32 (H－11)
33 (H－11)
34 (H－11)
36 (34トレ)
35 (H－11)
① (H－1)
② (X2－Y3)
③ (X3－Y2)
0 1／4 10cm
32～36
0 1／2 5cm
①～③
④ (H－2)
⑧ (X3－Y2)
⑦ (D－1)
⑤ (H－6)
⑥ (H－10)
0 1／3 10cm
④～⑨
⑨ (X2－Y2)

Fig.14 出土遺物 (3)

PL. 1

調査区全景（北より）

調査区全景（西より）

H－1号住居址（南より）

H－1号住居址遺物出土状態（東より）

H－2号住居址の竈（西より）

H－2号住居址（南より）

H－2号住居址遺物出土状態（南西より）

H－4号住居址の竈（北西より）

H－4号住居址遺物出土状態（南西より）

H－4号住居址遺物出土状態（南西より）

H－5号住居址（東より）

H－5号住居址の竈（北より）

H－5号住居址遺物出土状態（南より）

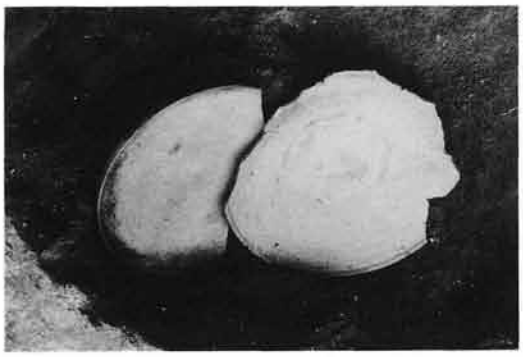
H－6号住居址（西より）

H－7号住居址（北西より）

H－7号住居址遺物出土状態（北より）

H－10号住居址（南より）

H－10号住居址の竈（西より）



H－10号住居址遺物出土状態（南西より）

H－11号住居址（西より）

Y－1号焼土（南より）

D－5号土坑（北西より）

D－9号土坑（南西より）

X2－Y2グリッド遺物出土状態（南より）

X2－Y2グリッド遺物出土状態（南西より）

X2－Y3グリッド遺物出土状態（北より）

PL. 5

1 (H－1)

2 (H－1)

3 (H－1)

4 (H－2)

5 (H－2)

6 (H－2)

7 (H－2)

9 (H－2)

10(H－4)

11(H－4)

12(H－5)

13(H－5)

14(H－5)

15(H－5)

16(H－5)

18(H－6)

19(H－6)

21(H－7)

22(H－10)

23(H－10)

24(H－10)

25(H－10)

26(H－10)

27(H－10)

28(H－10)

29(H－10)

31(H－10)

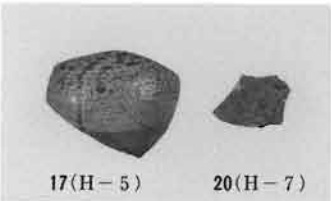
32(H－11)

33(H－11)

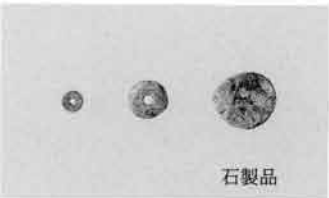
34(H－11)

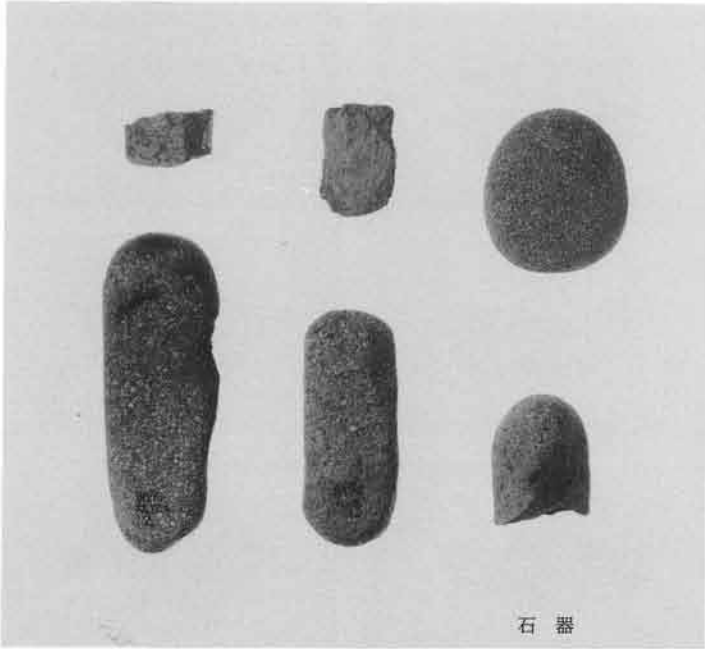
35(H－11)

36(34トレ)


17(H－5)　20(H－7)

8(H－2)　30(H－10)


石製品


石　器

抄　　録

フリガナ	モトソウジャミョウジンイセキジュウサン
書名	元総社明神遺跡XIII
副書名	西部第三明神土地区画整理に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	元総社明神
シリーズ番号	XIII
編著者名	戸所慎策　古屋秀登
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371　群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	1997（平成9）年3月19日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ﾓﾄｿｳｼﾞｬﾐｮｳｼﾞﾝ ｲｾｷｼﾞｭｳｻﾝ 元総社明神 遺跡XIII	ﾏｴﾊﾞｼｼ ﾓﾄｿｳｼﾞｬﾏﾁ 前橋市元総社町	10201	8A76	36° 23′ 10″	139° 02′ 30″	19960520 19960628	120m²	土地区画 整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺跡	特記事項
元総社明神遺跡 XIII	集落跡	古墳時代後期 ～平安時代	竪穴式住居址8軒 土坑8基、焼土8基	土師器、須恵器、 臼玉、石製模造品 瓦ほか	特になし

元総社明神遺跡　XIII

平成9年3月10日　印　刷
平成9年3月19日　発　行

編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　027-231-9531